

地域とTPP

交渉大詰め

■下■

マレーシアの首都クアラルンプールに立つ大型アウトレットモールに7月29日、ラーメン店が開業した。「ばり嗎」を展開するウイズリンク(広島市安佐南区)のマレーシア2号店。100平方メートルの店内にある50席は昼時、多くの客で埋まった。現地で開店を見守った江口順爾常務は「想定通りのにぎわい。日本の麺文化を伝えたい」と話した。

募る期待

麺は店内でつくるが、味の決め手となるスープは日本から輸出する。直接送ると関税が高いため、シンガポール経由で届ける。それでも輸送費がかさみ、客単価は現地の外食平均の2倍を超える千円に達する。「環太平洋連携協定(TPP)

ベトナムも視野

2012年に海外展開を始めたウイズリンク。シンガポールやインドネシア、香港にも出店した。その多くはフランチャイ



ウイズリンクがマレーシアに開いたラーメン店。日本から送るスープを使う (同社提供)

外食海外展開を加速

ズ(FIC)店。「最近では関税の撤廃や縮小で安くTPPを前提にFIC加盟を求めている海外企業が目立つ。今は商品の仕入れ値が高くて、将来は野に入れる。」

参加12カ国の国内総生産(GDP)が世界の4割を占めるTPP。政府が5月に東京で開いた一般向け説明会で、渋谷和

税関簡素化 中小も恩恵

久内閣審議官は「多国籍企業だけが利するといわれるが違う。むしろ地方の中小企業にTPPを活用してほしい」と強調した。TPPで目指す税関の簡素化が大きな後押しになる」とも述べた。

差を詰める好機

和裁会社のシルフィード(安佐南区)の岡上誠社長は、日本を加えたTPPの発効を心待ちにする。ベトナムの協力工場に日本から絹を送り、手作業で仕立てた着物を輸入して取引先の呉服店に納めている。「生地を日本から出す際の通関作業が中小企業には大きな負担。TPPで解消されるのでは」とみる。

かつて協力工場があった中国、そしてベトナム。両国と比べ、日本の通関は原産地の確認などで「非常に手間取る」と訴える。手続きで求められる書類の作成など、生地1枚で平均20分かかる。

全社員25人のうち5、6人が、毎日のようにこの作業に縛られている。貿易の自由化が世界中に広がる時代。遅い通関手続きを早く修正しないと日本は孤立する」と、一刻も早い大筋合意を求めている。

TPPを競争力を高めるチャンスと捉える企業もある。ハム、ソーセージなど製造の福留ハム(西区)。原料の輸入豚肉は関税が大きく下がる方向が示されている。中島修治社長は「米国の養豚業界は攻勢をかけてくるだろう。大手しか入手できなかった安い豚肉を中堅メーカーも買えるようになる。大手との差を詰める好機」と意気込む。

7月下旬の閣僚会合は大筋合意に至らなかつた。このまま交渉が「漂流」する可能性もある。日本が月内開催を目指す次の会合が、鍵を握るといなる。(山瀬隆弘)